介護老人保健施設

ほのぼの苑

だより

発行所
〒018-1401
潟上市昭和大久保字街道下92-1
医療法人 正 和 会
介護老人保健施設
ほのぼの苑
TEL (018) 877-7115
FAX (018) 877-7481
ホームページ
http://www.seiwakai-akita-no1.or.jp
編集責任者　加藤稔樹
発行責任者　小玉敏央

施設運営適正化委員会

平成十三年三月二十二日発足

多年に渡り、当苑の施設運営適正化委員会の委員として、真心ある施設づくり活動にお力添えして頂き、誠にありがとうございました。

施設と家族が協力し、入苑者の快適な入苑生活を援助出来たことも、一重に皆様のご助言、ご指導の賜にほかならず、ここに心よりお礼申し上げます。

石井　俊英　様（任期　平成十三年三月～平成十八年三月）
川上　景昭　様（任期　平成十三年三月～平成十八年三月）
加藤　武志　様（任期　平成十三年三月～平成十八年三月）
近藤　嘉之　様（任期　平成十七年一月～平成十八年三月）
斉藤　茂子　様（任期　平成十六年十月～平成十八年三月）
佐藤　忠直　様（任期　平成十三年三月～平成十八年三月）
澤井　昭　様（任期　平成十四年六月～平成十七年三月）
杉渕　静　様（任期　平成十三年三月～平成十四年八月）
門間　鋼悦　様（任期　平成十七年四月～平成十八年三月）
渡辺　剛　様（任期　平成十三年三月～平成十八年三月）

小野バレエ団

四月一日、毎年恒例となっている『小野バレエ団』の皆さんが、今年も来苑して下さいました。

小野バレエ団の演技は、バレエだけではなく、触れ合いの時間というものがあり、可愛らしい子供たちとの触れ合いを楽しみにしている方も多く見られました。

様々な曲に合わせて、子供たちが、一生懸命踊る姿に手拍子を送る方や思わず見入っている方もいて、皆さん楽しまれているようでした。成人のダンスが始まり、リズミカルな音楽と大人数に圧倒される踊りもあり、入苑者・通苑者の方々も楽しい一時を過ごして頂けたと思います。

そして、触れ合いの時間が始まり、小野バレエ団の皆さんがステージから降り、入苑者・通苑者の列の間に入り、向かい合って、一緒にダンスや握手をしたり、時間いっぱい触れ合いをして頂き、小野恵子代表がおっしゃっていた「元気の交換」を入苑者・通苑者の方々だけではなく、バレエ団の方々・職員も含め、全員と交換とする事が出来たと思います。

会場は終始、和やかな雰囲気に包まれ、素晴らしいダンスを鑑賞し、そのダンスに参加することができ、良い一日を過ごすことができました。

（加藤　稔樹　記）

三月誕生会

三月二十六日、ほのぼの苑食堂にて、三月の誕生会が行われました。外はまだ寒さが厳しい中、この日は春を先取りし、色紙に桜や油菜の絵をご家族の方と、一緒に誕生者の方々に描いていただきました。

作品を作り始め、誕生者の方やご家族の方も、少し悩んでいる様子でしたが、見本を見て、職員手作りの筆で叩いて、色をつけていくと、少しずつ浮き上がる桜の絵や風景に「キレイだ～」と納得のいく作品を作り上げたようで、思わず言葉を漏らす方もおりました。中には、兄の誕生日を祝おうと、参加された入苑者の方もおり、二人の笑顔が印象的でした。始めは、緊張や戸惑いがあったものの、作品を作り終える頃には、いつもの笑顔が見られました。

また、今回の誕生会では、ボランティアの方が来てくださり、女性誕生者の方には、化粧をしていただきました。鏡を前に座る誕生者の方の表情は少し緊張気味で、固い表情でしたが、化粧が終わり自分の顔を見ると「あや～、しょしな」など、笑顔が見られ、少し照れ気味な様子でした。

誕生会も終わりに近づき、正面玄関の雛人形の前で作品を持ち、ご家族の方と一緒に記念撮影を行い、最後には、誕生ケーキが振る舞われました。誕生会のケーキは、厨房の小熊シェフが、腕によりをかけて作ったこともあり、「すごいな～」と感動されている方もおり、ご家族と話しながら、食べるケーキは特においしいのだろうなと表情から伺えました。ご多忙の中、多くのご家族の方に参加していただけたことを、とても嬉しく思います。ありがとうございました。

（千葉　也寸志　記）

ほのぼの苑　ちょっとイイ話

「ほのぼの苑　ちょっとイイ話」は、苑内での感動する話をご紹介するコーナーです。

日頃介護を行っていて、入苑者の方に、ご家族の方に喜ばれるサービスを提供出来ているか、不安になるときがあります。

ちょっとした会話の中で感じ取れることもありますが、この度、ある方の話しを聞き、私達の心が温まり、励みとなりました。今後も皆さんに心の籠もった介護を提供していきたいと改めて思いました。

今回、特別に許可を頂き、その素晴らしい文章をほのぼの苑だよりに掲載することに致しましたので、皆さんご覧下さい。

素晴らしい老人保健施設
それは「ほのぼの苑」

私の母は、ほのぼの苑に、凡そ四年間という長い間、お世話になりました。本当にありがとうございました。

母を思う余り、ほのぼの苑には、毎日のように、足を運ばざるを得ませんでしたが、感心、感動の場に度々遭遇し、この施設は、他に類を見ない素晴らしい施設だと実感しました。

母は、晩年、寝たきりの状態にはなりましたが、リハビリをして、少しでも体力をつけようと、ベッドの所に、身体の部位の運動マニュアルを写真付きで掲示し、介護士の方が献身的に身体や手足を動かし、身体に活力をつけてくださいました。

また、四月のある日のことでした。部屋に入ると、満開の桜を彩った貼り絵が、母の枕元に掲げられていました。私は、その絵をそっと取り、母に、見せながら、「おばあさん、花見だよ、きれいだよねぇ。」と、声をかけました。母は、目を大きく開きながら、頷きました。

五月には、こんなこともありました。部屋に入ると、ぱっと目に飛び込んできた一枚の絵がありました。それは、色鮮やかな紫陽花の貼り絵でした。外に目を向けると、雨がしとしとと降っていました。

七月には、誕生会の時に写してくれたと思われる写真が、ベッドの所に飾られていました。

桜も紫陽花も誕生会の写真も、介護士の入所者を想う温かい心から出た行為だと思うと目頭が熱くなるのでした。

職員の研修・研究にも、ずいぶん力を入れているようです。

医療事故を防ぐためには？

入所者の体力をつけるためには？

身体拘束をゼロに近づけるためには？

等々、日々の仕事の中に課題を見つけ、その解明に打ち込んでいます。

そして、施設長の励ましと深い理解の元に職員は、全県・全国へ出かけ、研修・研究の成果を発表しています。

また、適正化委員会でお願いしたことが、誠実に受け止められ、実行に移されていることも、特筆に値することです。

施設内の適切な湿度ということが提言されますと、各部屋に、即、乾湿計が取り付けられました。小玉医院の待ち時間表示も、利用者にとって、大変ありがたいことでした。

夏に行われる「花火を含めた健康まつり」も、サービス事業として、地域の方々から大変喜ばれています。

職員の姿勢・勤務態度にも感心させられます。施設を訪れる人への明るいあいさつ、無駄話のない真剣な勤務態度、入所者への優しい言葉かけ等々、どれを取り上げても本当に素晴らしいと思います。

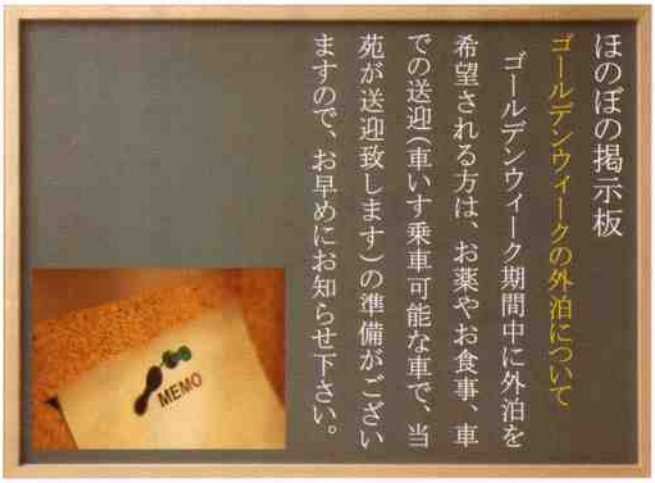
老人保健施設ナンバーワンの「ほのぼの苑」と正和会の益々の発展をご祈念申し上げながら、御礼の言葉に代えさせていただきます。

４月の誕生会・行事のご案内

平成１８年４月の誕生会・行事は、４月下旬に天候の良い日を見計らって、花見に出かける計画を立てています。

出発日、時間は個人掲示板へ掲示し、お知らせいたしますので、参加を希望される方は、お手数ですが、ご確認よろしくお願いいたします。

４月行事担当職員一同



四月お誕生日の方々
おめでとうございます。

幸福

私は、昭和六十二年十月に故郷である当時の昭和町に戻ってきた。その一週間後の朝、旧小玉医院の待合室で、診察を待っていた七十歳代の男性が、意識を失って倒れた。すぐに処置室に運び入れたが、呼吸は停止し、心電図は心室細動を示していた。心肺蘇生術の基本は、心臓マッサージと人工呼吸であることは言うまでもない。気管内挿管をしようとしたが、喉頭鏡・気管チューブはおろか、フェースマスク・アンビューバッグすら無かった。仕方がないので、事務員に患者さんに口をつけて人工呼吸をさせた。心室細動には直流除細動器が絶対適応であるが、当時は一般開業医に常備しているはずも無かった。私に出来ることは、前胸部を叩打することだった。教科書的には一～二回施行で効果が認められない場合は直ちに除細動を行なうというのを知りながら、五回も六回も叩打するしか、なす術がなかった。血管確保をしなければと思いながら、点滴の指示をしたが、ショックで収縮した末梢血管には、翼状針は入らなかった。蘇生術の途中で、救急車の出動要請も考えたが、当時は井川町に一台の救急車が配備されていたに過ぎず、高規格車が無かった事と基幹病院に到着するまでの時間を考え、連絡はしなかった。南秋田郡の町村で心停止患者が発生した場合、この地域は大潟村を除いて最も救急隊から遠く、そして基幹病院からも離れている故に救命率は低いだろうな等と考えながら、三十分以上蘇生術を行なったが、心電図の基線は平坦となった。死亡宣告後一時間ほどで御遺体は家族に引き取られて帰り、我々は通常の業務を続けた。

普段の診療の中で患者さんを助けたなどと言う記憶は、私にはほとんど無い。多くの方は、自分の力で治るべくして治っていく。しかし、この七十歳代の男性は、或る程度の設備と訓練されたスタッフさえあれば、数少ない助けられた患者さんの一人だったとの思いが今でも残っている。「除細動器さえあれば」と常に頭から離れなかったし、諸般の事情によりすぐには購入できなかったが、これを手に入れた時の喜びは、今でも鮮明に思い出すことが出来る。

あれから二十年近くが経過し、この地域も大きく変わったと一種の感慨深ささえ覚える。しかし今までもそしてこれからも、この地域にとって必要なものは何なのか・そのために我々は何を成さなければならないのかを、仲間と一緒に考えながら行動していきたいと常に思っている。

初心を大切にしたい。

編集後記

この号が発刊される四月二十二日は、ほのぼの苑の開設日となっております。開設から十年を迎え、新たな試みとして、家族会を開催致しました。今後も利用者の皆さんが過ごしやすい施設づくりを目指して、ほのぼの苑が良い施設だと言われるように、頑張りたいと思います。

（カ）